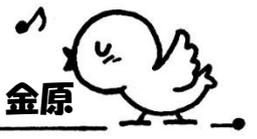




研究通信



呉市立広南小学校

令和7年10月27日(月) 文責:金原

今年度2回目の授業研究。先生方、3年生の子どもたちが真剣に学ぶ姿を通して胸を打たれたのではないのでしょうか。この日までに教材選定、さらに自分の言葉で思いを表現することが難しいという学級実態を踏まえ、思考錯誤しながら教材研究や指導手段について熱心に取り組んでこられた大矢先生の授業提案から、数えきれないほど多くの学びを得ることができたことと思います。

「得た学び」をこれから自分がどのように実践していくのか、ここからが重要となってきます。

「考え、議論する道徳科の授業」本当に奥深く、簡単なものではありません。それでも思考錯誤しながら追究していく、指導者の意識と熱い姿勢が子どもたちを少しずつ変えていく授業づくりを目指し**「できることから1つ1つ」**実践していきましょう。大矢先生、ありがとうございました。

「授業改善の視点」を大瀬戸先生が ChatGPT を駆使し、文字化してくださいました。

谷田教授、岩城指導主事からいただいた助言を今後の授業づくりにぜひ生かしてくださいね。



★ 第3学年「たまちゃん、大すき」の授業研究より ★

【児童の振り返りより】

今日の学習で、あい手の気持ちを考えることが大切だと思いました。りゆうは、あい手の気持ちを考えないと、あい手がいやだと思っているかもしれないからです。(M児)

協議会記録概要：道徳の授業を振り返って

本協議会では、教材の特性や児童の思考の深まり、また「哲学対話」を取り入れた指導のあり方について活発な議論が交わされました。

1. 授業の良かった点（児童の様子・指導の工夫）

多くのグループから共通して、以下の点が評価されました。

- ・ **積極的な発言と参加**：子どもたちが非常に多くの意見を出し、次々と意見が繋がっていった点が良かった。教師の発言よりも、子どもの発言がとてもたくさん聞こえてきた点も評価されました。
- ・ **教材の有効性**：子どもたちが知っているキャラクター（たまちゃんやまるちゃん）の話だったため、とても考えやすかったという意見が多くありました。

- ・ **導入の工夫**：事前アンケートを用いて、スムーズに本時のねらいに入れた点が有効であったと捉えられました。また、各場面で「なぜそうだったの?」「なんで仲直りできたの?」といった問いをもたせたことで、子どもたちが考えやすかったという意見もありました。
- ・ **視覚的支援の活用**：整理されている板書やハートの視覚的支援（ハートやシルエットなど）があり、子どもたちが**状況や心理的な状況を理解しやすかった**と考えられます。
- ・ **読み聞かせ（反読）の質**：教材を読みこむ際の感情表現が上手で、声のトーンを変えたり、大切なところで間をとったりするなど、丁寧な読み方をされており、子どもたちが**教材に真剣に向き合えた**と考えられます。

2. 課題点および改善の方向性

議論を通して、主に「思考の深まり」と「対話の質」に関わる課題が抽出されました。

グループ	主な課題点	改善の提言
Aグループ	途中で発言が流れてしまい、大切なポイント（ずっと仲良くするために大切なところ）が掘り下げられなかった。新しい、また 具体的な考えが出にくく、自分に置き換える発言が少なかった 。	重要な発言をもう少し聞き取り、問い直す ことで、その後の発言がより具体的な考えへと深まったのではないかと。
Bグループ	「同じで」ばかりの発表が多く、相手の意見を批判的に考えたり、切り返したりするような議論の雰囲気不足していた。少し テンポが速すぎて 、子どもたちがじっくり考えることが難しかった。	教師が意図的に「今の意見はどうなんだ?」といった 批判的な質問を投げかける ことで、議論が深まる可能性がある。リラックスした雰囲気作りも大切。
Cグループ	教師が「お互いの気持ちに気づいたってことだよね。」など、 子どもたちから引き出したい重要な言葉を先に言ってしまう部分が見られた 。「分かり合う」という概念が曖昧なままで、「どうしたらそれが実現できるか」という具体的な方法論に踏み込めなかった。	振り返り（最終的なまとめ）で、子どもたちの実態を見取り、道徳価値が深まっている子を 意図的に指名することも必要 である。
Dグループ	哲学対話の最中、雰囲気がかたく、「ちゃんと知ったことを言わなきゃ」という感覚、「なるほど」「そうか」「それってどういうこと」といった 自然な会話が増やせたら良かった 。最後は、現実に戻し、「自分ごと」として捉え直す機会がさらに欲しかった。	哲学対話の中で、もう少し 子どもたち同士の会話を増やす ことが提案されました。

3. 専門家からの指導・提言（深い学びと対話の必然性）

岩城指導主事や谷田教授からは、深い学びを実現するための重要な視点が示されました。

深い学びの実現と話し合いの必然性

- ・ **深い学びの要素**：深い学び（文科省定義の4項目）を実現するためには、アウトプットが必要であり他場面での活用場面の設定が重要です。広島県では**比較**、**分類**、**関連付け**、**選択**、**合成**、**評価**、**創造**の**6つの話し合いの姿を目指すよう提言**されています。
- ・ **話し合いの必然性**：課題がおもしろい時、高度な情報に差がある時、また必要なパーツをそれぞれが持っている時に、話し合いは深まります。

・ **教師の介入の必要性**: 「本当にそう?」「もしこうだったらどうなるのかな?」といった発問を通じて教師が介入し、多様な意見や考えを生み出す手助けをすることが必要です。

哲学対話と授業の焦点

・ **対話の形式**: 哲学対話は、円形になって、教師も対話のサークルの中に入り、平等な立場で展開していくのが一般的です。今日の形式（教師が黒板の前に立ったまま）では輪になっていることの必然性が薄れてしまう可能性があります。

・ **言葉の正確性**: 教材の要約や発問において、教師の言葉（例:「気づいた」）が教科書に書いてある（例:「ハッとした」）とずれると児童の教材理解がぶれる可能性があるため、教員は発問の言葉遣いに細心の注意を払うべきです。

・ **友情・信頼の深化**: 授業のねらいである友情・信頼を深めるためには、単なる相互理解に留まらず、トラブルや困難を乗り越えることによって、より友情や信頼が深まったという視点を明確にし、さらに焦点を当てることで、より深い学びにつながるという提言がありました。

これらの議論は「個別最適な学び」と「協働的な学び」を効果的に循環させ、深い学びを確かなものにするために、教師が指導観や発問を明確にしておくべきかという点で、非常に示唆に富むものでした。

授業の振り返りでは、子どもたちの積極的な発言という「良さ」があった一方で、議論の質の深まり、教師の介入方法、そして「哲学対話」の形式と必然性に関する「課題」が多く指摘されました。

課題を克服し、授業を改善するための具体的な対策を議論のステップごとにまとめて提示いたします。

改善策の提言

1. 児童の思考を深めるための指導法と発問の工夫

議論が「同じで」ばかりになったり、具体的な考えが出にくかったりした点を改善するために、教師は意図的に議論に介入し、児童の思考を掘り下げる必要があります。

課題の側面	改善策（指導・提言）
具体的な思考の引き出し	途中で出てきた重要な発言（例：ずっと仲良くするために大切なところ）を、教師がもう少し聞き取ってねぎらうことで、その後の発言がより具体的になるように促す。
批判的視点の導入	子どもたちだけでは難しい「批判的な雰囲気」を作るため、教師が意図的に「今の（意見）はどうなんだ?」といった批判的な質問を投げかける。
理由付けの明確化	「同じで」の発表が多い中、理由（原因）を付け加えることを促す。理由があれば、その理由に対してさらに批判的な見方（「いやいや、そんなんじゃないかな」）ができるようになる。
曖昧な概念の掘り下げ	「分かり合う」といった曖昧な概念（例：お互いの気持ちに気づいた）を、教師が先に言葉にするのではなく、「どうしたらそれが実現できるか」といった具体的な方法論や行動に踏み込ませる発問の支援を行う。
道徳的価値の焦点化	友情・信頼の深化がねらいの場合、たんに相互理解に留まらず、トラブルや困難を乗り越えることによって、より友情や信頼が深まったという点に焦点を当て議論を深めていく。
深い学びにする質問	議論が表面的に進むのを防ぐため、「本当にそう?」「いつもそうなる?」「もしこうだったらどうなるの?」といった教師の介入的な発問を行い、多様な意見や考えを生み出す手助けをする。

2. 対話の雰囲気と進め方の改善

テンポが速すぎた点や、雰囲気がかたかった点を改善するための対策です。

課題の側面	改善策（指導・提言）
議論のテンポの調整	テンポが速すぎると子どもたちがじっくり考えることができなくなるため、 意識的に議論の速度を落とす 。
リラックスへ雰囲気作り	子どもたちが自分や相手の意見を批判しても議論を続けられるような 砕けた雰囲気や風土を作ることが大切 である。
自然な会話の促進	「正しいことを言わなきゃ。」といったかたい雰囲気を解消するために、「なるほど」「そうか」といった 子どもたち同士の自然な相づちや会話を増やす工夫 を取り入れる。
議論の循環	意見がただ一直線に進むのではなく、「戻ったり」「立ち止まったり」しながら、交流する中で 議論の循環（例：「前のあれってこうじゃない？」） が生まれるように促す。

3. 教師の言葉遣いと授業構成に関する改善

授業者が発問や要約を行う際の言葉遣いや、授業構成に関する改善点です。

課題の側面	改善策（指導・提言）
教材の言葉との一致	要約や発問の際に教師が使う言葉（例：「気づいた」）が教科書の言葉に書いてある（例：「ハッとした」）と異なると、児童の教材理解がぶれる可能性がある。 発問の言葉遣いに細心の注意を払い 、教材にしっかり乗った形で理解を促す。
深い学びの実現	深い学び（比較、分類、関連付け、選択、合成、評価、創造）を実現するためには、 話し合いの必然性が重要 である。課題が面白い、情報に差がある、必要なパーツをそれぞれがもっている、といった 条件を満たすように授業を設計 する。
範読の質の維持	範読（読み聞かせ）は、 声のトーンを変えたり、大切なところで場を取ったりする 等非常に丁寧に行われていた。この丁寧さを維持することで、子どもたちが引き続き、教材に真剣に向き合いやすくなる。

4. 哲学対話（円形対話）の改善策

今回の授業で取り入れた「哲学対話」を真に機能させるための改善策です。

課題の側面	改善策（指導・提言）
教師の参加形態	哲学対話は、教師もサークルの中に入り、 対話の参加者として平等な立場で展開 するのが一般的である。教師が常に黒板の前に立つという指導者の立場を取るのではなく、サークル内に入ることが望ましい。
円形の必然性の確保	円形になっているにも関わらず、形式的に発表を続けているだけに見える場合、輪になっていることの必然性が薄れてしまう。教師がサークル内に入り、 対話の言葉の一つ一つを大切に する指導に 徹する必要がある 。
板書のトレードオフ	教師がサークル内で対話に集中する場合、その時間帯は板書（メモ）を失うことになっても、 対話の質を優先すべき である。

5. 授業の締めくくりと自己への接続

学習内容を確実に定着させ、「自分ごと」として捉えるための改善策です。

課題の側面	改善策（指導・提言）
自己への置き換え	ストーリーのまとめで終わるのではなく、さらに一歩進んで、「じゃあみんなは？」「みんなの周りの出来事では？」という風に、 現実に引き戻し 、学習内容を「 自分ごと 」として捉え直す機会を設定する。
振り返りの意図的指名	振り返り（感想）で、大事なことが書けている児童がいたのに発表の機会がなかった場合があるため、 最終的には大事なところを意図的に言わせる指名（意図的指名） を行うことが重要である。

これらの改善策は、授業のねらいを明確にし、道徳科で求められる「考え、議論する道徳」の深い学び（探求的な学び）を実現するために、有効であると考えられます。

谷田教授の言葉について、提供された協議会記録に基づき、その指導や示唆に富むコメントを明快かつ包括的にまとめさせていただきます。

谷田教授は授業全般を非常に細やかに観察されており、授業者（大矢教師）の工夫を高く評価しつつも「より深い学び」を実現するための道徳科教育における核心的な課題と改善点について、多角的な提言を行っています。

1. 授業全体および指導の工夫に関する評価

谷田教授は、まず授業者の指導姿勢や導入の工夫について高く評価しました。

- **授業者の安定感と準備**：授業者（大矢教諭）は非常に落ち着いており、余裕があるように見えた。
学級がよく作られていると感じられました。授業手順が非常にきめ細かく、**細部にわたって様々な「しかけ」や「配慮」があった**と評価されています。
- **導入の有効性**：導入で使われた事前アンケートについては「**内容が取ってつけたようなアンケートでなかった**」点が良かったと述べています。
- **視覚的支援**：まる子のシルエットの使用は、ざっくり人間像を見せるのではなく、シルエットにすることで「奥ゆかしい」やり方であり、**子どもたちに考えさせる工夫**だと指摘されています。
- **範読（読み聞かせ）の質**：範読が非常に丁寧であり、声のトーンを変え、大切なところで間（ま）を取るなど、「**読み方**」が大切にされていた点が素晴らしいとされました。これは**教師が教材を大切にしているというメタメッセージ**が子どもたちに伝わり、**子どもたちが教材に向き合いやすくなる効果がある**と考えられています。

2. 議論の形式と教師の介入に関する提言

対話の進め方においては「リレー発言」や「教師の言葉遣い」に関して、より深い議論を促すための注意点が挙げられました。

- **リレー発言の課題とトレードオフ**：リレー発言には、多くの子どもが意見を言えるというメリットがある一方で「あいの手（相づちや受け止め）」が入りにくくなるというデメリットがあります。これは、**発言数をとるか、一人ひとりの意見をしっかり受け止めるかという「トレードオフの関係にある」と**、認識されています。

- **板書と発言の優先順位**：教師が板書に徹する形で展開すると、子どもたちの発言を他の子がしっかり聞くという点では、**教師が一度発言を受け止めて展開した方が良い可能性も示唆**されています。
- **教師の言葉遣い**：教師が教材を要約する際に**教材と異なる言葉**（例：「ハッとした」を「気づいた」）を使ってしまうと、子どもたちの教材理解がずれてしまう可能性があるため、**発問や要約の言葉遣いに細心の注意を払うべき**だと強く指摘されました。
- 「自分ごと」への接続：授業の最後に児童が現実に戻し、**「みんなはどうするのか」と自分ごととして捉え直す機会を設けることが重要**というグループ協議で出た意見に肯定的な見解を示しています。

3. 友情・信頼を深めるための授業の焦点

谷田教授は、今回の授業のねらいである「友情・信頼」をさらに深く探求する焦点の当て方について、具体的に提言しました。

- **相互理解を超えた深化**：この教材の議論は「相互理解」に近かったとしつつ、本当の友情や信頼は、たんなる理解だけではなく、**「トラブルや困難を乗り越えることによって、より深まったんだね」という視点に焦点を当てるべき**だという見解を示しました。
- **ハートの視覚的効果**：ピンクのハートが赤い大きなハートになるという「しかけ」は非常に効果的で（キュンとなるもの）でしたが、このハートがなぜ大きくなったのかという点では、**困難を乗り越えたことの意義や理由付けについてもう少し追究したかった**という感想を述べています。

4. 哲学対話の形式とその課題

導入された哲学対話の形式については、その本質的な進め方について解説しました。

- **教師の役割と形式**：哲学対話の本流では、教師はサークルの外で指導者として立つのではなく、共にサークルの中に入り、**平等な土俵で対話の参加者の一人として展開していくのが一般的である**と説明されています。
- **トレードオフ（板書の放棄）**：教師が対話のサークルに入っている場合、その時間（5分や10分）は**板書（メモ）を捨てても、対話の質を優先すべき**というトレードオフの関係性を提示しました。哲学対話では、**その場で語られる言葉一つひとつを大切にすることが中心となるため**です。
- **介入の必要性**：小学3年生の段階では、子どもたち自身では「どう思う？」と質問し合うのは難しいため、教師が「今の友達の発言についてどう思いますか」といった質問を投げかけ、**ファシリテート（介入）することが必要である**と述べられています。
- **雰囲気作り**：哲学対話は真剣さも必要としつつも、あまりになごやかすぎると慣れてしまい、友達の顔が見えることでざわつくため**「弛緩と緊張のバランス」をどう作るかが重要**であると述べています。

